

## 第1部近代ツーリズムの時代

### 序章 近代ツーリズムとは

旅と観光の世界史の文脈でみると、その発展史には三度の不連続的展開の節目があった。その第一は、19世紀半ばの科学技術による交通革命、すなわち陸上における旅客鉄道の誕生であり、海上における蒸気船の登場である。人類は定住して以来旅をしてきたが、陸上の旅は徒歩か、動物の背中に乗るか、あるいは動物の牽く乗り物に乗ってきた。移動の手段に革新的進歩がなかったから、旅の形態は古代から鉄道誕生前までは大きくは変わり得なかった。事実1834年の政変で、イタリア訪問中だったサー・ロバート・ピールが組閣のためにロンドンに呼び戻された時、1800年昔のローマ帝国の官吏より速いスピードで戻れたわけではなかったから、引退していたウェリントン公爵がその間短期に首相を務めなければならなかった。

旅客鉄道の登場によって輸送は大量、迅速、安全、安価になり、旅と観光が初めて苦痛と危険から開放された。鉄道はヨーロッパの全ての国、アメリカ合衆国、カナダのみならず、ヨーロッパの植民地となった国々でも普及し、世界的に移動が容易になっていく。

大陸間の交通手段である蒸気船もこの時期に大きく発展する。風まかせだった帆船時代には、定期航路の開設は無理であったが、風に左右されない蒸気船が登場して大陸間の移動が容易になり、やがて世界観光の時代へと移行して行く。鉄道と蒸気船が行かない国内地域の移動手段は、馬車から自転車、自動車、乗合自動車（バス）へとさらに移動が自由かつ迅速になり、観光のための移動が日常化していった。

第二の節目は、有給休暇の法制化（1936年）によって、ヨーロッパの労働者階級に週単位の連続有給休暇が保証されたことである。資本主義経済下で大多数を占める労働者階級は、「仕事を休めば無給」では、遊びの旅のために何日も仕事を休む余裕などなかった。第二次世界大戦後「万人に観光を！」をスローガンに、国民のための観光政策が展開され、先進国では、観光は全国民に可能な消費行動となった。観光需要の拡大は、旅を商品化する旅行業の飛躍的発展にもつながった。鉄道や客船や航空機などの交通機関の進歩の成果を、国境や海洋を超えて人々に享受させるためには、観光の旅に必要な予約手配の煩雑さを肩代わりする旅行業者の進化が必要であった。マスツーリズム時代の到来である。

第三が航空機の発展、とくに高速ジェット旅客機と巨大収容力をもつ巨人機・広胴機の登場である。船を含む地上の交通機関では往来が不可能であった遠隔地や僻地へも短時間で旅ができるようになり、人類の行動半径はそれまで人類の接近を拒んできた辺境・未知の大地を含む地球全体へと広がった。航空輸送力の拡大によって、途上国やあらゆる地域が観光開発を望む時代となる一方で、観光は地球環境問題に独特の形でかかわることになる。

古代から中世、そして18世紀の啓蒙主義の時代まで、人々はそれぞれの時代の状況と制約の中で、好奇心や冒険心に支えられて旅をしてきた。本書の目的は、そのような長い時間を経たあとで、鉄道の誕生によって生まれる新しい観光の旅を近代ツーリズムと名付け、近代ツーリズムの誕生から現代のマスツーリズム時代に至る発展の経緯を、観光行動を可能にする産業の発展とともに辿ってみることである。

本書の構成は大まかに、第1部を19世紀前半の近代ツーリズムの誕生から第二次世界大戦勃発まで、第2部を大戦後の労働者階級のツーリズム参加によるマスツーリズム時代への移行から現代までの展開を考察する。そして、時系列的に分断して通史部分に組み込みにくいテーマについては、テーマ別に誕生から現代に至る縦割りの考察をとりまとめ、それらを「テーマ別論集」として別掲した。

**近代ツーリズムとは** 18世紀のイギリスで、新しいタイプの教養と楽しみを求める長距離周遊旅行を指す言葉としてツアーtourが誕生した。宿泊を伴う教養や楽しみを目的とする旅が、諸々の義務的旅行とは異質な旅として認識されたことを示すものであった。数年にも及ぶ長期のツアーはグランド・ツアーと呼ばれて18世紀に大きく発展したことはよく知られている。この新しい旅を普遍化する概念語「ツーリズム」が派生（最古の使用例）したのは1811年である。オクスフォード辞典によれば、ツーリストもツーリズムも、やや蔑視的ニュアンスを伴って使われ始めたという。まじめな関心も知識ももたず、面白おかしく見物して回る行為が、当時の有識者の嚮嚮を買うほど目立つようになったということであろう。いずれにしろ、観光の旅が富裕階級や知的エリートだけのものから、広く中産階級にまで広がってきたのである。

では、「近代」を冠した「近代ツーリズム」、あるいは「近代社会におけるツーリズム」とは何か。今日では日常的事象になっているツーリズムだが、近代以前には選ばれた少数のみの行動であった。産業革命の最大の成果の一つである鉄道によって旅が物理的に容易になり、他方、フランス革命を経て市民権が確立され、中産階級が観光の旅をすることへの心理的な障壁が低くなった。目的地への移動が容易になったために、必然的に目的地における宿泊・食事・現地交通をはじめとする旅客用の施設サービスが拡充され、それらが業として成り立つ時代が到来したのである。

この時代はまだ、有閑階級の避暑避寒を除いて、都市観光がツーリズムの主体であった。これについては、万国博覧会の開催と都市としてのパリを代表として、成長する都市観光の展開を見てみたい。かくして、19世紀半ばに鉄道とともに誕生した近代ツーリズムおよびその用語は、馬車の時代までの近代以前のツーリズムと対比される一方で、労働者階級が観光に参加する現代のマスツーリズムとも対比して使用される。

もうひとつの目覚ましい変化は、大洋を越える国際観光旅行の発展である。18世紀から19世にかけて帆船が最高度の発展を見せる一方で、19世紀前半には海洋を渡る蒸気船の開発競争が始まる。大陸間国際観光の始まりであり、世紀末には浮かぶホテルと言われるほ

どの豪華客船も登場する。1869年にはスエズ運河が開通し、世界一周の観光旅行という未曾有の旅も始まる。

最後に旅行業の誕生と発展である。近隣への短距離旅行なら旅行者自身が鉄道、汽船、ホテル、レジャー活動を自ら手配し、サービスを購入して観光することもできるが、遠距離あるいは外国など未知の目的地への観光旅行となると、それなりの情報やノウハウが必要である。各種の旅のサービスを旅行者に替わって手配し、あるいは事前に商品化して販売する旅行業者の誕生こそ、真の観光発展の最重要ポイントであった。

鉄道の普及から100年足らずの間に、人類のモビリティは大発展を遂げ、とりわけ余暇の最も動的、かつ時間多消費型の観光旅行が特権階級だけのものから中産階級へ、そして、19世紀の末頃からは上層労働者階級にも普及してくる。観光の旅は、前人たちの想像を絶する発展を見せる。以下、旅客鉄道の誕生とその後の旅行・観光産業の発展の経緯から見て行こう。

第1部では、旅客鉄道が人類のモビリティを拡大し、観光行動が日常化していく時代の旅を探究し、併せて、蒸気客船の大陸間定期航路の開通によって、観光行動がアメリカ新大陸からアジア・オセアニア方面にまで広がっていく過程を考察する。遠距離国際観光（世界観光）の始まりである。

鉄道は産業革命の最大の成果の一つであり、その巨大な推進力でもあった。鉄道輸送自体は、1825年にストックトン〜ダーリントン間に石炭運搬を主目的とする初の商業鉄道が誕生したのが最初である。石炭や鉄鉱石などの原材料や産業製品などの大量で重い物資輸送の必要に迫られ、馬に替わるけん引力として開発され実用化された蒸気機関車であったが、またたく間に人の輸送が貨物輸送を上まわることになる。最初のこの鉄道は人を乗せることを目的としたものではなく、また、蒸気機関車でけん引する点は同じでも、有料道路のように軌道を他者にも利用させる方式であった。しかし、1830年に開通したリバプール〜マンチェスター間の鉄道は、明らかに運河と有料道路という既存の輸送手段を超えるものとして計画され、人も貨物も大量に輸送することを前提にした本格的な鉄道であった。また、そうでなければつくる意味がなかった。線路、駅、機関車、車両、必要な付属施設のすべて、ならびに運営・運行する従業員を含むひとつの企業体として「鉄道会社」が設立された。その後（1833年）、ストックトン・ダーリントン鉄道も人と貨物の両方を運ぶ通常の鉄道に生まれ変わったことを付記しておこう。